

発 明 文 化 論

〈第 45 回〉

丸山 亮

遊びの創造性

震災被災地の子供に、津波ごっこの遊びが広がっているという。学校の長いすやジャングルジムの上から、津波が来ます、避難してくださいと叫んだり、砂場でバケツの水をひっくり返して遊ぶ子がいる（朝日、11.6.28）。周囲には実際の被災者もあり、その受け止め方は複雑だ。遊びを通じて癒されるという意見がある一方で、恐怖心や不安をかきたてられるなど、不快な思いをする人もいるだろう。

「禁じられた遊び」というフランス映画があった。大戦による爆撃で人や動物が殺されていくのを悼むところから、墓を作って十字架を立てる遊びが始まる。子供たちの無邪気な吊いごっこはだんだん度を越していき、教会の墓地から十字架を盗むところにまで発展する。

ただ、津波ごっこは禁じられた遊びとは違い、人の目の届く範囲で行われる一種の再現ドラマなのだ。そこにはむしろ、子供の創造性の萌芽があるのではないか。事実、新聞の投書欄には、心配いらないとこれを擁護する意見が載った（朝日、11.7.5）。この筆者は子供のときに体験した台風のあと、自然発生的に「台風ごっこ」や「水害ごっこ」が始まり、小川の上流をせき止め、下流に作った家や道を一気に流してそれを見ることを楽しんだ思い出を報告している。そして、この台風を同時体験したものでなければわからない、また、子供でなければ考えられない素晴らしい遊びだったともいう。

阪神淡路の大震災でも地震ごっこをする子はいたようだ。非日常の環境に接することが、想像力の刺激となる。そうしてみると天変地異が子供の遊びを誘発するのは、むしろ自然な成り行きなのだろう。もっとも戦争には戦争ごっこがあるが、これが大人にまで広がると、単純に遊びと言っては済まされなくなる。

平安末期の流行歌、今様を集めた「梁塵秘抄」には、遊びを歌った歌がいくつか見られる。有名な「遊びをせんとや生まれけん、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそゆるがるれ」のほか、「戯れ遊の中にしも、先らに学びん人をして、」などは、遊びの讃歌だ。古来、遊びは人生の本質ともとらえられていた。

子供の遊びは、世界中、環境とうまく折り合いをつけている。インドではシカやヒョウが、中央アフリカではカモシカの狩りが、遊びにとりいれられ、ゲーム化して勝敗を競う楽しみともなっている。さらに遊びは、人間にとどまらない、動物、特に哺乳類一般に観察されるようだ。犬や猫がじゃれあって遊ぶ姿は、私たちの周辺によく見られるが、特に人とよく似たチンパンジーでは、その研究が進んでいる。坂道を下るとき、でんぐり返しや、手足を伸ばして鉛筆のように転がり回転する、仰向けになって枯葉の海を背泳ぎのように進む、などの行動が見られるという（松坂崇久「遊びを生み出す出会いと発見—チンパンジーの遊びと環境」）。それらの意味は何なのだろうか。

古代ギリシャの古典的な芸術論では、ミメシス、模倣が創造行為の本質と考えられていた。その理論は今日に及ぶ。芸術は自然を模倣するけれども、それを単に再現するのではなく、再解釈する行為によって、人間は創造する。子供の遊びの中にも、もちろん創造性につながるものがあるのだ。子供は環境と一体化する経験を通じて、新しい世界のイメージを獲得し、次の創造へとつなげていく。大震災は負の側面ばかりが強調されるが、これを克服する過程で、遊ぶ余裕と、創造の契機が生まれることを願いたいものである。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）